

陳 述 要 旨

2008年10月29日

高 橋 是 良

原告の高橋です。私の気持ちを発言させていただきます。

私は、1942年(昭和17年)7月3日に横浜市中区で生まれました。詳しい履歴は先に提出した陳述の通りです。生まれてから66年間ずっと、横浜市に居住しています。1958年(昭和33年)より約48年間、建築の世界で働いてきました。1968年(昭和43年)大山工務店に入社し、現場に戻りました。そこで足かけ10年働きました。1975年(昭和50年)頃、長い間の夢であった自分でやるという、独立する事を考え、社長の大山氏に「独立の事を考えています。独立するか否か判断したら、1年くらいのゆとりをもって報告します。」と申し上げました。私達職人の世界では、円満に独立するというのはなかなか大変で、キチッと筋を通さないと後々いろいろと大変だからです。

そして1977年(昭和52年)「念願の独立をしました。当時は景気も悪く、独立の時期としては決して良くはないのですが、ここで頑張れば先行きは必ず良くなると思い、一生懸命働きました。最初は自分の仕事はあまりなく、下請け、孫請けと苦しかったのですが、私を慕って職人たちが大勢ついて来たので、その職人達を遊ばせないためにもシャカリキになって働きました。周りの人達にも助けられ仕事も段々増え、元請である自分仕事もたくさんやるようになり、年商1億円も突破するようになりました。1978~1979年(昭和53~54年)には、横浜市より工業団地分譲の募集があり、経営審査にも合格し、重量鉄骨で工場も完成し、若い職人たちとこれからもっともっと良くなろうと決意を新たに致しました。

夢と希望が現実となり、ますます力がわいてきました。さあ、これからと言う、その矢先、1982年(昭和57年)40歳の健康診断のとき、診療所より「もう一度来てください」と言われて行くと、先生が難しい顔をして去年のレントゲン写真と今年のレントゲン写真を見比べて「去年見つけられなかったのは仕方がないかな」などと独り言をつぶやいていたので、「先生、がんですか?」と聞いた所、先生は写真に気を取られていたためか「うん」と言っていました。もっとも、その後は、術後退院前日の告知までは良性だったと言っていましたので、良性だと思っていました。

が、それから26年間私の肺がんとの闘いがはじまりました。

私は病気の時は、専門家である医者からの指示に従う方針なので、途中から良性と言われて「ああ、そうなんだ。」と思いました。「良性だけど取らないよりも取った方がいい」といわれ、「それなら切取ってください」と受け入れました。家族もがんと告知されないまま手術になり、妻は手術後初めてがんと知らされました。後に妻がその時ひどくびっくりし、主治医にがんとは聞いていないと抗議した事を聞きました。またこれで、私の人生は終わったと思ったと知り、妻や家族につらい思いをさせてしまったなあと思いました。

私は、退院の前日主治医に呼ばれ、「貴方は肺がんです。」と告知されました。その時は何故か、あまりショックは受けませんでした。ただ、早急に後の事を何とかしないといけないなと思い、「色々始末しなければならぬ事があるので、あとどのくらい生きられますか？」と質問した所、先生は「5年生存率は30～70%だ」と言われました。「30%の方になったらヤバイな」と思い、早く後の整理、残る妻と二人の子供の事を何とかしなければとっていると、先生に「今後は抗がん剤を飲んでください」と言われました。すぐに、同業の仲間ががんになって頭がハゲて、顔はガイコツが皮をかぶったみたいになって死んでいったのが頭に浮かびました。

退院後は仕事の整理をしながら闘病生活に入りました。抗がん剤は肉体的には思ったほど大変ではなかったのですが、その後の免疫療法というのを始めたら大変でまいりました。1回注射をすると1時間位で気分が悪くなるので、すぐ帰り布団に横たわり、後は2週間位気持ちが悪くただ天井を見てボーっとしている文字通り生きているのか死んでいるのかと言う感じの生活でした。薬が切れて体調が戻るとまた注射という繰り返しでした。のちに注射から注射までの間で具合が悪い日数がだんだん減ってくるまではとても大変でした。

幸運にも命をとりとめました。仕事の方はせつかく頑張ることで独立し体制が整い、さあ、これからだと燃えていたのに、身体があまり使えなくなり仕事をするのが無理となり、職人たちも知り合いに引取ってもらったり他へ移ってもらったりして、半ば休業状態になりました。この悔しさ、つらさは、言いようのないものでした。

数年の治療が一段落したので、工場の土地や建物の為の借り入れのローンも残っており、生活の為にも何とかしなければと家族や友人の応援を受け、一人でポツポツ仕事を始めました。身体は静かにしていれば息が苦しくないのですが、身体を動かす

と酸素が足りないのかすぐにハアハアとなっていました。仕事では材木や材料をかついだり持ったりは出来なくなり、階段も3階まで上るとしばらく話も出来ないくらいハアハアしてお客さんに「ちょっと休ませてください」と言うありさまでした。仕事が取れた時だけ昔の職人さんや知り合いの職人さんに来てもらって仕事するというありさまです。

私は子供の頃からスポーツが好きでした。20代の頃、草野球は2つのチームに入っていました。水泳なども大好きでしたが、肺を切ったからはクロールで息を吸ってから次の息継ぎまでもたず、水を飲んでしまうありさまです。手術前は何百メートルでも平気で泳げたのですが、手術後は息を止めて7mくらい泳ぐのがやっとになってしまいました。現在も肉体労働ができず、スポーツもまったく出来ません。身体を使うと酸欠になってしまうからです。

病院の治療が終わり、また先生にも「もう大丈夫だよ、奇跡的に助かったね」と言われました。不思議なもので、告知された時は妻子の事や後始末の事は考えましたが、死というものを考えるゆとりがなかったのか割と平気でした。ところが助かりそうだと思えてきたら、死の恐怖が続々と襲ってきました。そして、頭の中は死ぬ事が絶えず占拠していました。あのなんとも言えない、体中が本当に震える様な気持ちにもなり、夜中に「ワー」と大声を出してしまう事もあり、このままではおかしくなってしまうと妻にも内緒で精神科に通う事になりました。

私はこの裁判に原告として参加する中で、国やタバコ会社が言っている事を聞いて、とても信じられませんでした。政府が国際条約『たばこ規制枠組条約』に調印しているのに、国が過半数の株を持ち財務省の役人が天下りし会社を支配し、経営に責任を持っているタバコ会社が条約を守らないのは理解できません。同じ政府の一部である厚生労働省がタバコは身体に良くない等発表し、また毎年11万人以上の方が亡くなっているにもかかわらず財務省は売り続ける。こんなバカなことがあっていいものなのでしょうか。

牛乳、肉、事故米、その他今色々な食物が世に騒がれています。メラミン入りの食材、また事故米、肉の偽装にしても、死に至るほどでないとは発表されても、公開の場やテレビなどで謝罪し、会社は市場からも社会からも退場する事になっています。それなのにタバコだけは何万何十万人と病気になり死んでいるのに、国やタバコ会社は謝りもせず、また商品も回収しないのは何故でしょうか。こんな無法な事を許すわ

けにはいきません。

国やタバコ会社は「タバコは嗜好品だ」と言っていますが、他の嗜好品と言われている物、例えばコーヒーを飲んでいる人の隣の人がコーヒーの香りで病気になるでしょうか。コーヒーを毎日何杯も飲み続けても死ぬでしょうか。お酒を飲んでいる人が、毎年何万人も死ぬでしょうか。また周りの人がアルコール中毒になるでしょうか。嗜好品でタバコのように毎年11万人もの人が死ぬ事はないのです。嗜好品で、周りの人が病気にはならないのです。

タバコは、吸っている人は勿論の事、吸わない人も受動喫煙で病気になるのです。周りの人に害が及ぶような物は決して嗜好品ではないのです。これが世間の常識ですが、タバコ会社や財務省は知らぬ振りをしているのです。

そんなに安全・大丈夫と言うならば財務省とタバコ会社の役員はWHOや医学会で言われているタバコに含まれるタールや発がん物質を自分の身体に入れて実験し、安全だという事を証明してほしいものです。

私はこの裁判を通じて、タバコが本当に身体に悪いという世界の常識が認められ、タバコが規制され、私の様にタバコで死ぬ思いをし、また多くの亡くなった人の様な事が無くなるように、特に次代を担う青少年がタバコの害から解放される事を切に望んでいます。

最後に、裁判という法制度上仕方がないのかもしれませんが、国やタバコ会社の役員は代理人任せ、誰一人としてこの法廷に出ていません。ここへ来て、私やタバコで病気になりそして死に至った多くの人々の苦しみをじかにその耳で聞き、その目で見てほしい。あなた方にひとかけらでも人間らしさがあるなら、毒の塊とも言えるタバコを売るのをすぐやめてほしいものです。

私や妻そして2人の子供が受けた言葉に言い表せないようなつらさ、苦しさは、私達で最後にしてほしいです。

以上、私の陳述と致します。